

「心が鈍い」

ルカの福音書 24 : 13 - 35

April.4.2021

ルカの福音書 24 : 13 - 35 (パワポ)

Preface

主イエス様がよみがえられました。

死の支配を完膚なきまでに打ち破り、すべての罪を贖い尽くし、私たち人が新しいのちに歩める道を綺麗さっぱりと切り開いてくださいました。

私たちを捕らえて離さなかったすべての暗闇の勢力と、罪と死の束縛を打ち砕き、のろいとわざわいと罰から私たちを救い出してくださいました。

神が神として、私たち人にしてあげられることの出来る最善を成してくださいました。

エペソ書を見ますと、イエスキリストの死からの復活を通して成してくださいました救いの業を、「天にあるすべての霊的祝福」と言っています。

つまり、神が人に与えることの出来る最善こそ、キリストの復活であり、復活したキリストが共に歩んでくださるということです。

人が享受することの出来る祝福で、これ以上の祝福はありません。

使徒パウロは、むちで打たれ、石で打たれ、難船して海上を漂い、人から迫害され、仲間からも責められ、労し苦しみ、眠ることも出来ない夜を何度も過ごし、食べられず飲めず、飢え乾き、寒さの中に裸でいることもありましたが、

キリストの復活を我が復活だと信じ、復活されたキリストと共に人生を歩み、その歩みを実感できるならば、苦難や困難を前にし、苦難や困難の渦中にいたとしても、キリストの復活に勝る祝福はないということ、またそのキリストと共に生きているという感謝が湧いてくるとパウロ自身が書いた手紙の中で告白します。

弱くてもキリストゆえに強く、すべてを失っても失ったものすべてがちりあくたに思え、死ぬことさえも益であり、どんな境遇にあってもキリストの復活ゆえに満足することが出来ると言います。

さらに、「そんな事を言っているなんて正気じゃないと言われても、復活されたキリストが我が内におられる」という事実は変わらないとまで言います。

Part One

もちろんパウロだって生身の人間ですから、いつもいつもこんな風に思えるわけではありません。

パウロも、弱さに打ちひしがれ、苦しみの中で身もだえし、自分の内に悪が存在しているという葛藤を常々していました。

しかし歩んできた道を、歩まされた道を振り返ってみると、目には見えないかもしれないけれども、この肉眼で見ることに、

確かにキリストが困難の中同行し、共にくびきを担って下さり、共に助けて下さり、御言葉を与えてくださり、その時その時に適った必要な力と、助けてと、物をお与えてくださったということを、パウロは実感しました。

そんなキリストが共に歩んでくださったという、目には見えないけれども目で見る以上の魂の奥深くから揺さぶられる信仰体験から出て来た告白の言葉こそ、私たちが良く知っているローマ書 8 : 28 の言葉です。

ローマ人への手紙 8 : 28 (パウロ)

知るんです。

キリストが共に歩んでくださっていることを知り、そのすべてが益とされていることを魂が実感するのです。

そしてもし、この実感が私たちに無いならば、それは神様のせいではなく、あまりにも簡単に喜び、あまりにも簡単に絶望する私たち側の問題です。

あるいは、神の約束に従った歩みにおける恵みの信仰体験が、まだまだ足りなかったり、浅いからかもしれません。

若い時のヤコブよりも年を取ったヤコブの方が、若い時のヨセフよりも年を重ねたヨセフの方が、若い時のモーセよりも年老いた時の気力に溢れ、誰よりも柔和であったモーセの方が、共に歩みながらすべてを益としてくださる神をより多く体験しているように、信仰には年輪が求められるものでもあるのでしょう。

だから、信仰の先輩方やもうすでに天に召された方々は、主が私達に置いてくださった恵みの生き字引であり、また神が施してくださった誇りでもあります。

Part Two

マタイの福音書の最後を見ますと、よみがえられたイエス様が、天に上られる前に弟子たちに、「あらゆる国の人々を弟子とし、父と子と聖霊の名においてバプテスマを授けなさい」という、所謂、大宣教命令というものを命じられました

が、その大宣教命令をどんな言葉でイエス様が閉じられたか、ご存知ですか？

「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ28:20)という言葉です。

「わたしは、いつもあなたがたとともにいます」が、主イエス様がこの地上で発した一番最後の言葉です。

このイエス様の最後の言葉は、面白いことに、最後の言葉なのに最後の言葉らしからぬ継続性を持っています。

そしてその継続性が、いつかどこかの時点で終わりを迎えるものではなく、永遠に続く継続性を持っています。

最後の言葉ならば、「さよなら、ごきげんよう」などの、「はい、終わりです」という意味の言葉で締めくくることが自然かもしれませんが、イエス様は、永遠に続く継続性を持った言葉で、地上での歩みを終えました。

つまり、終わっているのに終わっておらず、むしろ物理的な、時間的な制限を超越した同伴を約束しておられます。

最後なのに、永遠にずっと続くという妙です。

先ほど読んだルカの福音書に登場してきます二人の弟子は、このイエス様の妙を体験しています。

「わたしは、いつもあなたがたとともにいます」という妙を、目に見える形で、耳にも聞こえるかたちで、手で触れることの出来るかたちで体験しています。

なのに、ともにおられる復活されたイエス様が分かりませんし、見えません。

これが私たち人間の妙です。

見ても見えず、聞いても聞こえず、触っても感じないのが、私たち人間の妙です。

弟子たちの“有り得ない”という先入観が、見えず、聞こえず、感じ無くしています。

Part Three

大概、私たちの先入観というものは、人の思想や経験や教育や啓蒙などによって、自分の内に構築されてきた確信です。

そして、その確信はいつもなぜだか、客観性を持っているという不確かな確信に満ちあふれています。

今、この弟子たちが持っている先入観は、死んだ人がよみがえるはずがないという確信です。

そして、その先入観は、人から教えられ、自らもある程度経験し、その先入観に同調する人の方が圧倒的に多いはずだという客観的確定に満ちています。

人は誰もが、自分のことを客観的な思考が出来る人であり、客観的な視点を持っていると自負しますが、突き詰めていきますと結局のところ、そのすべてが主観的であるということを見出します。

私たちは物事の客観性を証明し確立するために、データとか、資料とか、情報とかを駆使しながら、照準を定めた物事が客観的に見ても正しいと言わしめるための方法や方式を編み出し用いて、客観的に見ても正しいと言わしめますが、結局のところ、その客観性も誰かの主観性が積み重なって出て来たものです。

でもそんなことはよく考えずに、“人がそう言っているんだから”と客観性の皮をかぶった主観性を真に受けながら、ある意味私たちの歴史・社会がここまで進んできたとも言えるかもしれません。

建築こそ人間の創造性を表す文化遺産だと言い、化石燃料を用いた動力こそ世の中の速度を上げ、世界を変え、世界を一つに繋ぐと言い、原子力こそ永久に続くクリーンで安全なエネルギーだと言い、都市化や近代化こそ原始的な生活から脱却し人の英知を示す最善の方法だと言い、生産と消費こそ世の中を潤わせる唯一の方法だと言い、戦争に勝つことこそ国の発展につながるんだと言い、銃よりペンだと言って有害無害ありとあらゆる情報を発信し、逆にペンより銃だと言って戦争を偶像化し、そして、行きつくところ、人が認めてくれなくても自分が気持ちよければそれでいいという主観さえも客観的に捉えようと正当化して、世界が、人々が、地球全体がここまで来て、悲鳴を上げています。

全世界の人々が日本と同じような生活をするためには、地球が2.3個分必要で、アメリカと同じような生活をするためには地球が5個分必要な世界。

それが今私たちの生きている世界であり、ありとあらゆる主観性を客観的だと言わしめるために、偽りの客観性という衣をかぶせて回っている世界です。

このような言い訳の出来ない世界に生きているというだけでも、私たち人間は罪人であるという十分な証拠になるでしょう。

人が罪人であるということは、どこまで行っても結局のところ、自分の考えは正しいという客観性を装った主観性に浸っている存在だとも言えるかもしれません。

私たち人はどこまで行っても、主観的な判断しか出来ない罪人ですし、唯一物

事すべてを客観的に見ることの出来るお方こそ創造主なる神であり、キリストです。

こう言いますと、それも主観的だろと思われるかもしれませんが、聖書はこれを事実として伝えています。

だから、先ほどのローマ書 8 : 28 のような「振り返ってみるとあれもこれも神の御手によってすべてが益とされる」という告白が出てくるわけです。

主観性に捕らわれている私たちが、永遠の客観性をお持ちの神様の前に降伏し、納得させられる体験を積み重ねた時に出てくる言葉です。

Part Four

すみません、ちょっとややこしい話になってしまっていますが、要するに、人はみんな、自分勝手だということです。

今、ルカの福音書に登場している二人の弟子は、自分たちの考える一般常識という客観性を装った主観性に捕らわれて、復活されたイエス様と顔と顔を合わせて話し、一緒に歩いているにもかかわらず、イエス様だと全然気づきません。

復活される正にその瞬間のイエス様の姿をビデオかなんかで撮っておいて見ることが出来たとしても、まあ信じない、信じられないのが、私たち罪人の妙です。

見ても見えず、聞いても聞こえず、触っても感じない妙です。

だからキリストの復活が信じられる信仰は不思議ですし、神の業としか言いようがないんですね。

今ここで、人の考える常識という客観性を装った、主観性に捕らわれている弟子たちのことを 16 節、25 節でこう言っています。

ルカの福音書 24 : 16, 25 (パウロ)

目がさえぎられ、愚かな者で、心が鈍くて、聖書の言葉が信じられず、イエス様を肉眼で見てもイエス様だとわからない、気付けない弟子たち。

でも、彼らは信仰的にも思える立派な言葉を口にします。

ルカの福音書 24 : 19 - 21 (パウロ)

彼ら二人は、イエス様のことを、行いにもことばにも力のある方で、望みをか

けるに値する方だったと言います。

もちろん、焦点がずれているところもあります。

イエス様のことを、キリスト（救い主）・イエスとは言わずにナザレ人イエスと言ったり、ローマ帝国の支配下にある母国イスラエルがその支配から解放され、今度は支配し統治する側にまわるといような世における自分たちの願望が叶えられるか叶えられないかをもって、イエス様の能力を計ろうとする視点のずれは見られますが、

それでも、イエス様は力に溢れ、行いも立派で、希望に値する方だとイエス様のことを否定はしませんし、むしろ、信仰的にも思える言葉を口にします。

Part Five

この二人の弟子たちを見ていますと、やけに私自身と重なって仕方がありません。

口ではイエス様のことをキリストだ、神だ、永遠のいのちだと信仰的に思える言葉を並べ立て、神の言葉を解き明かすと言いながら、こうして人前に立って聖書の御言葉の話を礼拝の大部分の時間を費やししながら、ほぼ毎週のようにお話しさせていただいておりますが、

「わたしは、いつもあなたがたとともにいます」とおっしゃった復活され今も生きて働き、共にいてくださっているイエス様のことを肌感覚で感じることも出来ずに、「イエス様は、行いにも、ことばにも力のある方で、この方にこそその望みがある」と言っただろうかと、この二人の弟子たちと同じではないだろうかと感じてしまいます。

土浦めぐみ教会に戻って来てから2年7ヶ月が経ち、主任牧師になってから2年が経ちました。

この2年7ヶ月、特に主任牧師になってからの2年間は、本当に2年しか経っていないのかと思うほどに、大変で濃密な時間でした。

「こんな大変で濃密な2年間を、この先まあ最低でも10回以上は繰り返さなければならぬのか」と思いますと、気が滅入ってしまい、寝ている時「ああ、このまま敷布団も、畳も、家の基礎も突き抜けて、地面深くに埋まりたい」と心底願うことがあるほどに、

復活され、いつも共にいてくださっているイエス様が見えず、聞こえず、感じられない時があります。

でも、そんな苦しい時間を通して、日曜日に御言葉を語るために説教壇に立ち、皆さんと共に祈り、賛美し、献金し、礼拝を献げ、疲れている時は出られない時もありますが夜のオープン礼拝に出席してから、家に帰る車中で家内と言葉を交わし、食卓に着いて食前の祈りを献げて目を開けた時、

「ああ、やっぱりイエス様は僕と共に、この1週間を寄り添いながら歩んでくださっていた！ あの苦しみも、あの悩みも、あの疎外感も、あのつれなさも、あの暗黒のような時間もすべて益としてくださり、益としてくださるために、ずっと僕の話聞き、聖書の御言葉を語って下さり、教え諭して下さっていた！」と、一瞬の内に実感します。

イエス様が共に歩んでくださっているという実感が、静かな湧き水のように湧いてきます。

二人の弟子たちと同じように、イエス様に祈って、ホッとして食事を取る瞬間、イエス様が見えてきます。

そんな1週間の歩みを、今日まで138回繰り返してきました。

愚かで、鈍くて、信じることの出来ない私を、静かにとても静かに、たまに叱り飛ばすかのように、ずっと寄り添ってくださっている復活のイエス様を繰り返し実感してきました。

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いから、あなたも私のくびきを負って従い、わたしから学びなさい。 そうすれば、たましいに安らぎを得ます」と語り掛けてくださるイエス様に、文句たらたら言いながら、時に賛美し、時に感謝を献げ、時にたましいの深いところからの喜びを吐露し、その比類なき喜びを噛みしめながら、歩ませていただいております。

そして、悟らされます。

「ああ、復活されたイエス・キリストゆえに罪赦され、永遠のいのちを頂き、天の御国で、またやがて来る新天新地で、神の子として、神の民として、王である祭司として、イエス様の友としての身分が与えられている以上の祝福はない」ということを悟らされます。

二人の弟子たちのようにイスラエルを解放するとか言いながら、自分の欲望や、自分勝手な望みが叶えられないことをもって、キリストの復活を疑うような者にも、

キリストが復活してくださり、寄り添い、共にいてくださり、ホッとして歩んできた道を振り返った時、イエス様のお姿を心の深いところで実感できる恵みに与っていることこそ最高の祝福だと日々思われ、そんな小さな思いを重ねています。

また、富むことを目的とせず、強くなることを目的とせず、馬鹿にされないことを目的とせず、獲得することを目的とせず、

失っても失ったすべてのものをちりあくと見なし、イエス・キリストの復活の恵みゆえにどんな境遇にあっても満足することが出来るということ、日々

少しづつ学び、実感させていただいております。

Conclusion

イエス様は、イエス様を信じる者たちに、イエス様の復活以上の祝福もなければ、イエス様の復活以上の幸いもなければ、イエス様の復活以上の喜びもなければ、イエス様の復活以上の希望もなければ、イエス様の復活以上の富もなければ、イエス様の復活以上の満足もなければ、イエス様の復活以上の愛もないことを、イエス様を信じる者たちの人生すべてに渡って語り、教え、諭し、経験させ、説得し、納得させてくださいます。

99.99%ではなく、100%私たちが納得するところまで導きなさり、同伴してくださっています。

皆さんには、復活されたイエス様が見えていますか？

皆さんには、復活されたイエス様が聞こえていますか？

皆さんは、復活されたイエス様を感じておられますか？

皆さんは、復活されたイエス様を信じる事が出来ていますか？

イエス様は、私たちの心が鈍くて、愚かで、信じられない者たちであることを十分に知っておられます。

それを承知の上で、私たちの罪の身代わりに死なれ、復活してくださり、そして、復活したお姿を見せてくださいました。

だから、安心出来ます。

イエス様は、重々承知の上で、今も私たちに語り掛け、同伴し、ともに食事をしてくださっています。

気付こうが気付かなかろうが、そうしてくださっております。

そして時に適って、心の内が燃え、さえぎられていた目が開かれ、キリストの復活の奥義を実感する祝福を味わえるようになっていきます。

私たちは今、イエス様の復活を祝うイースターの礼拝の場にいます。

イースターの礼拝の場へと導かれているということだけでも、十分に私たちの人生にイエス様が共にいてくださっているという証拠になります。

毎主日、毎週日曜日に礼拝を献げることが出来るのも、主イエス様の復活を根拠にしているから可能なことであり、復活されたイエス様ゆえに礼を尽くして拝するこの礼拝行為が意味のあるものとなり、主の前に香しい香りとなります。

ゆえに、死よりよみがえられたイエス様を排斥した信仰生活は有り得ませんし、復活したイエス様が信じられないクリスチャンというのも有り得ません。

キリストの復活があるからこそ、命に意味があり、命に意味を見出すことが出来ます。

だから今一度、決して世が与えることの出来ない心の内が燃えるような熱さ、喜びを思い出させ、私たちの日々の歩みに寄り添ってくださっている復活されたイエス様を覚えましょう。

キリストの復活こそすべてであり、答えです。

お祈りいたします。

祝祷：ルカの福音書 24：15